資料２

令和5年度第2回
発達障害者支援地域協議会

作業部会中間報告および
「報告書（案）」について

令和6年1月22日（月） 18:30～

仙台市発達相談支援センター

作業部会委員の構成

		氏　名	所属・立場(役職)
1	部会長	植木田　潤★	宮城教育大学教職大学院　教授
2	副部会長	佐々木健太郎	尚絅学院大学　総合人間科学系　教育部門　准教授
3		猪股　絵理子★	保護者
4		上西　創★	仙台城南高等学校　スクールカウンセラー
5		畔柳　清美	仙台市障害者就労支援センター　支援員
6		齋藤　淳子★	株式会社グッジョブ　代表取締役
7		斎藤　純子★	仙台市榴岡児童館　館長
8		西田　有吾	仙台市自閉症児者相談センター　主任相談員
9		増山　裕子	宮城県貞山高等学校　教諭

※★は協議会員兼務

＜令和４年度までの作業部会委員＞
伊藤雄高　特定NPO法人アスイクふれあい広場サテライト　ユニットリーダー・コーディネーター
齋藤涼平　仙台市障害者就労支援センター　主任支援員

報告書案　目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　学齢後期から成人期の発達障害児者支援を取り巻く現状及び課題
　1　乳幼児～成人期の相談傾向と課題
　2　アーチルによる関係機関へのヒアリング調査
Ⅲ　課題解決のために大切な視点
　1　平成26-27年度発達相談支援センター連絡協議会の提言書の概要
　2　作業部会での議論の経過
Ⅳ　具体的な取り組み
　1　各委員の取り組み　　2　アーチルの取り組み
　3　ご家族・当事者の取り組み　4　先進地の取り組み
Ⅴ　ありたい支援の姿(提案)
Ⅵ　今後期待される取り組み
Ⅶ　総括

作業部会の目的と取組み①

【目的】

　発達障害の特徴が明確ではないケースも含め，青年期から成人期に生じる課題を明らかにし，それぞれのライフステージにおいて一貫した支援のあり方を検討する。

【論点】

　「くらす」「はたらく」「たのしむ」の3つの観点を柱に，特に「たのしむ」を取り上げ，必要な支援の視点を検討した。

作業部会の目的と取組み②

報告書案　参考資料2

【取組み】

・作業部会による協議（令和3年度～現在まで5回，作業部会開催）

・委員の実践を見学・情報交換（令和4年9月）

・先進地視察

①「ら・るーと（東京都品川区）」（令和4年12月）

➡令和4年度　アーチル療育セミナー　基調講話を依頼

②「みつけばハウス（東京都世田谷区）」（令和4年12月）

➡令和5年度　アーチル療育セミナー　基調講話を依頼

③「PDDサポートセンターグリーンフォーレスト（横浜市）」（令和5年12月）

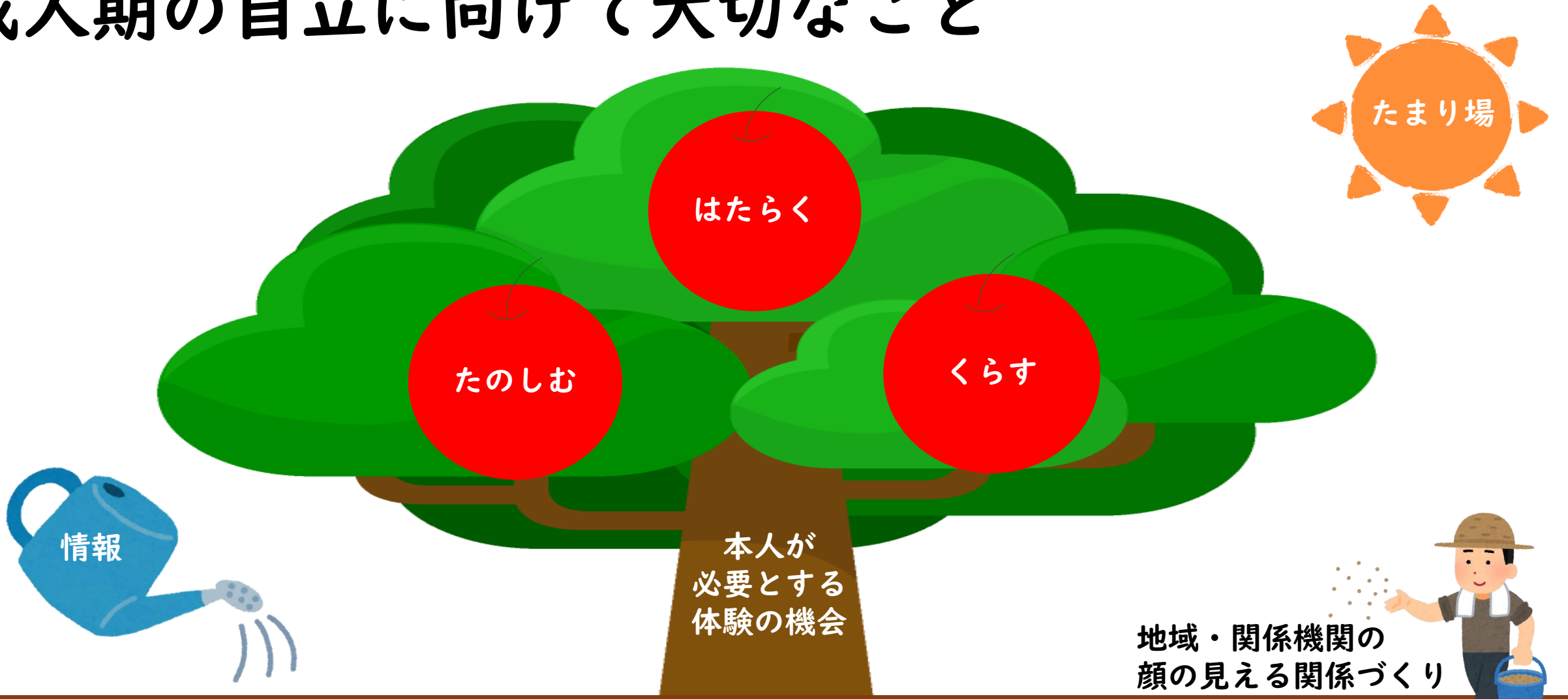
・療育セミナーでの成果報告（令和5年3月，令和6年3月）

成人期の自立において大切な視点

報告書案　Ⅲ　p10

本人が必要とする体験の機会から	安心できる関係づくり	・安心感できる人間関係，ネットワークを複数持っていることが支えになる ・苦手なことがあっても，ゲーム等の得意なことが自信につながる ・自分の役割を持つことは，自信をつけていくこと・自己肯定感につながる ・本人に困り感がなくても，さりげない支援を重ねることで頼ってもらう ・家族が本人を前向きにサポートできるよう支えていく
	生活の土台つくり	・生活スキルは働くための土台になり，将来の自立につながる ・小中学校時代から，学習だけでなく社会に出るために必要な経験を積む ・学校時代から地域の中で遊べる友達との体験は大切だ ・自分が好きなことを中心に，心地よく居られる場所が大切だ
	様々な情報へのアクセスしやすさ	・適切な社会資源とマッチングできるように，情報を一元化しておけると良い ・仲間づくり，居場所，余暇支援の場としてゆるくつながりながら，いろいろな選択肢があることをガイダンスし，支援につなぐ「ハブ」の機能が大事 ・多様な生き方や働き方についてロールモデルにアクセスできると良い ・発達障害児者が「社会に合わせる・適応させる」という根深い価値観がある
	具体的な経験の積み重ねと振り返り	・知識の有無だけでなく，経験することで初めて自分事として考えられる ・実際にやってみて振り返ることで，本人自身が得意不得意を知り，対処法も考えられる ・失敗しても再挑戦するステップを踏んで，段々上手になり，自信がつく

成人期の自立に向けて大切なこと



乳幼児期～学齢期

- 安心できる関係づくり
- 具体的な経験の積み重ねと振り返り
- 生活の土台づくり

たのしむ活動をとおして得られる経験

- 様々な課題を積み残してきた人＝“社会に出る準備性を高める”

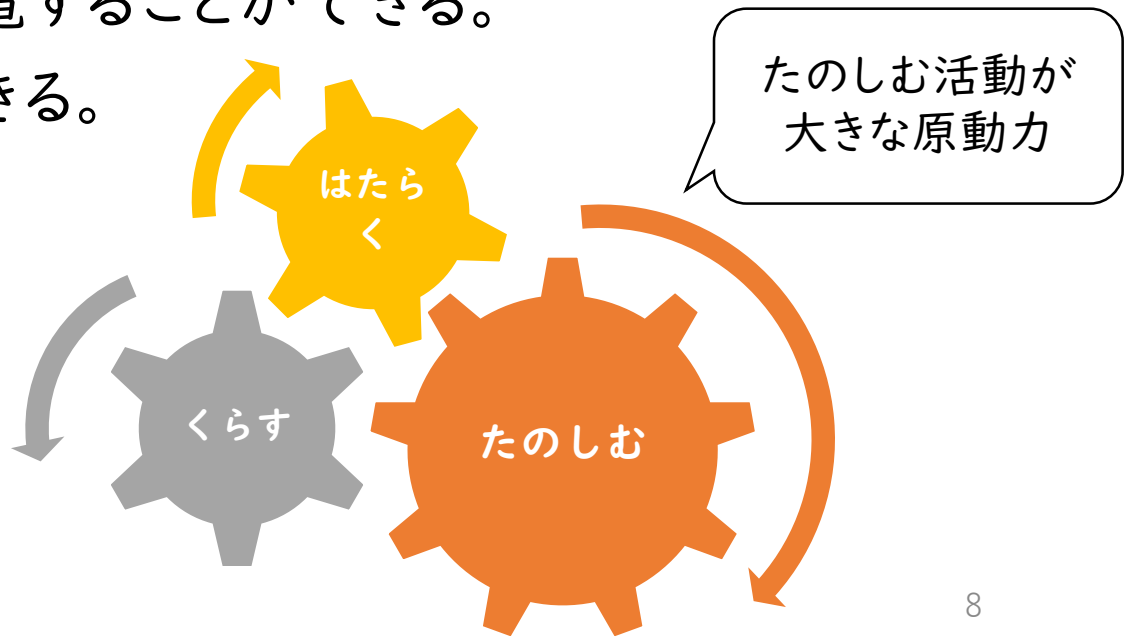
  ➡社会参加への意欲や自己肯定感が得られる。

  自分や周囲への気づき・学びが得られる。

- すでに働いている人＝“社会生活を維持する”

  ➡はたらきつづけるためのエネルギーを充電することができる。

  レジリエンス（回復力）を高めることができる。



具体的な取り組み①

	概要（キーワード）
ささけんクラブ インクルーシブスポーツキャラバン	・放課後や休日の居場所づくり，余暇支援 ・楽しみを通じた地域とのつながり
私立高校の 学習支援センター	・生徒にとって「困った時に相談ができる場・クールダウンできる場・安心できる居場所」になっている ・大学院生と楽しい体験とピアな関係づくり
県立高校の通級指導 校内カフェ	・「貞山応援プロジェクト」「貞山アイ」「貞山デザイン」 ・通級による指導，校内カフェの試行的実施
ふれあい広場サテライト	・「居場所の提供」「発達保障」「社会参加」を大事にした不登校児の居場所づくり
当事者活動	・利用者が企画した余暇活動 ・「ライフハック」集による振り返り，他の人の支援につなぐ

具体的な取り組み②

	概要（キーワード）
榴岡児童館	・誰が来ても良い地域のハブステーション「児童館」 ・地域で顔が見える関係のなか，家庭を孤立させない支援
就労移行支援事業所	・余暇が就労継続の支えになる。OB・OG会，「推し活」 ・商店街とのつながり➡理解啓発，体験実習の機会へ…
はたらポート仙台	「障害のある方」「企業・事業主」「就労支援事業所」の支援
ご家族	・段階的な生活スキルの習得 ・段階的な告知と本人の心の支え
アーチル ※地域活動推進センター，『ここねっと」と共催	・若年層を対象とした地域活動推進センターのプログラム （夏休み期間中の料理体験，休学中の学生の受入） ・発達障害のある大学生を対象とした就労前支援プログラム

報告書案Ⅴ　p24

作業部会での協議により得られた支援の視点

「たのしい」活動は、どのライフステージにおいても共通する“縦軸”となりうる。

- 本人への支援
  ①「たのしい」活動の提供
  ②居場所(心理的拠点)の保障
  ③ピアとしての仲間関係の構築
  ④成長・発達につながる体験の機会

- 支援者の在り方
  ⑤多様な支援者・場につながる「ハブ」となる役割
  ⑥支援機関(社会資源)同士がつながる仕組み

支援の視点における項目間の関連①

報告書案Ⅴ
p24-27

従来支援につながりづらかった
発達障害の特性を有する青年・成人

①「たのしい」活動の提供
興味関心、ホンモノ

・面白そうだから、参加してみようかな…！

・好きなことだからもっとやりたい！うまくなりたい！

②居場所(心理的拠点)の保障

③ピアとしての仲間関係の構築

・友達と一緒だからやってみよう！
・安心できる場だからやってみよう！

・失敗しても充電できる場・関係があるから大丈夫！

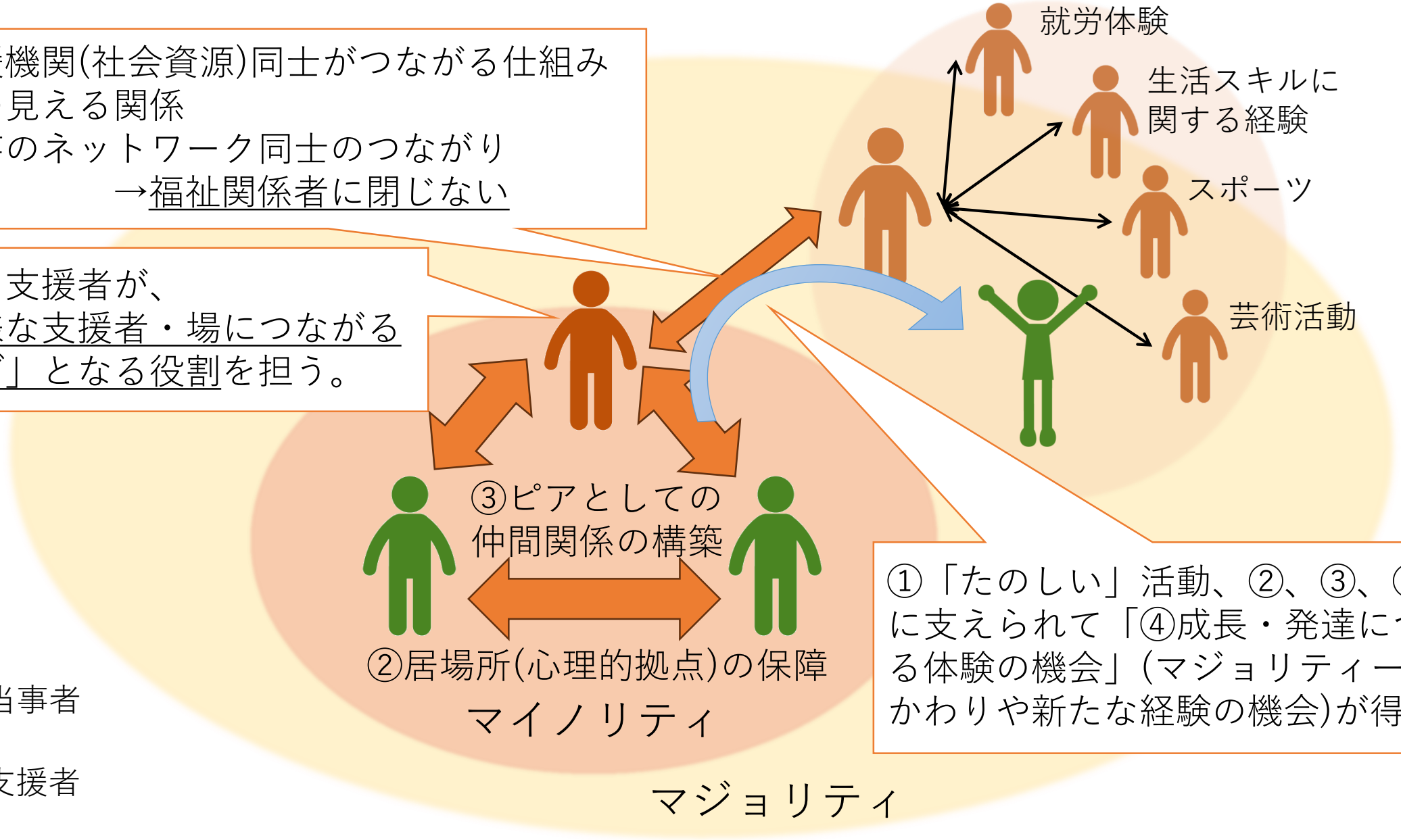
④成長・発達につながる体験の機会
経験のやり直し、生活・就労スキルの習得、自己理解、
マジョリティーとのかかわり…など

⑤多様な支援者・場につながる「ハブ」となる役割
⑥支援機関(社会資源)同士がつながる仕組み

支援の視点における項目間の関連②

⑥支援機関(社会資源)同士がつながる仕組み
＝顔の見える関係
　既存のネットワーク同士のつながり
　　→福祉関係者に閉じない

主たる支援者が、
⑤多様な支援者・場につながる「ハブ」となる役割を担う。



①「たのしい」活動、②、③、⑤、⑥に支えられて「④成長・発達につながる体験の機会」(マジョリティーとのかかわりや新たな経験の機会)が得られる。

不登校・グレーゾーンと言われる児童生徒

児童期

・面白そうだから、参加してみようかな…！

青年期

従来支援につながりづらかった発達障害の特性を有する青年・成人

成人期

生活スキルの習得

就労への意欲

①「たのしい」活動の提供

興味関心、ホンモノ

②居場所(心理的拠点)の保障

③ピアとしての仲間関係の構築

・好きなことだからもっとやりたい！うまくなりたい！

・友達と一緒だからやってみよう！
・安心できる場だからやってみよう！

・失敗しても充電できる場・関係があるから大丈夫！

④成長・発達につながる体験の機会

経験のやり直し、生活・就労スキルの習得、自己理解、マジョリティーとのかかわり…など

⑤多様な支援者・場につながる「ハブ」となる役割
⑥支援機関(社会資源)同士がつながる仕組み

<u>どの世代でも活用可能な仕組み</u>
(「楽しむ」を通じて、いつでも学び直しができる)
…やがて地域の居場所ともなる

今後期待される取り組み

報告書案VI
p28~29

1．「たのしむ」活動を軸とした発達障害児者支援体制の整備

・「たのしむ」活動は，人とつながるきっかけだけでなく，居場所の保障・仲間づくりの観点から，成長・発達につながる機会になる。

・「人を頼って良い」ことを体得する，意欲や自分への気づき等，社会に出る準備性を高め，「はたらく」ためのエネルギーを充電できる。

➡体験の機会，体験と振り返りの積み重ね，たのしい活動へのアクセス

2．支援者同士がつながる仕組みづくり

・「ハブ」となる地域の支援者が枠を超えてつながる仕組みづくり

➡「福祉関係者に閉じない」

・既存のネットワークを活かし，支援者が情報交換・アイデアを出し合う

当日配布資料　チラシ参照

令和5年度アーチル療育セミナー

【開催日】令和6年3月5日（火）14:00～17:00
【場所】仙台市福祉プラザ　ふれあいホール
　　※展示ロビーにて地域活動推進センターの展示ブース設置
【内容】
＜第一部＞基調講話　みつけばハウス　尾崎氏　　（90分）
　「たのしい活動からナニかが始まる・冒険が始まる」
＜第二部＞（65分）
　仙台での実践報告（作業部会委員4名）
　講師も交えたディスカッション